

上流の里と下流の民の交流・連携

水源の里を守る木曾川流域 みんなの会

ニュース

Vol.7

2013. 12/9

木曾川源流フォーラム

& 第6回水源の里を守ろう 木曾川流域集会

～川・流域でつながる歴史・文化・経済・暮らし～

「第6回水源の里を守ろう 木曾川流域集会」を1月25日（土）午後1時20分から行います。今回は全国源流の郷協議会の木曾川源流フォーラムと合わせた開催となります。

全国源流の郷協議会は、木曾川源流・木祖村や多摩川源流・小菅村、利根川源流・みなかみ町など、全国13の源流地域の自治体で構成されています。源流の郷協議会では、今年度の事業として「源流白書」づくりを取り組み、その一環として都市部でフォーラムを開催することになりました。

みんなの会は、2008年以降毎年「水源の里を守ろう 木曾川流域集会」を開催。2013年3月20日に第5回木曾川流域集会を行ない、その講演の中で四方八洲男さん（全国水源の里連絡協議会顧問・前綾部市長）は水源の里を振興する条件（内発的発展力）として、コミュニティ、下流の都市との交流、小さな経済、リーダーの存在、活動の継続の5つを提起しました。これらは縮小社会の中の下流域都市においても同様です。源流白書で「資源、資本、人が循環する小さな経済圏」「密度の濃い関係づくり、新しい流域構想」などが打ち出されてきています。1月25日の集会は、上流域からの発信として今後の交流・連携の課題や展望が語られるでしょう。下流域からは、“川・流域でつながる歴史、文化、経済、暮らし”から上下流交流・連携を深めていくことや流域での共生と循環などを述べていきます。ご参加下さい。

☆日時：2014年1月25日（土）13時開場、20分開始～16時45分

☆場所：栄ガスビル4階401会議室（サカエチカ6番出口、地下鉄矢場町駅6番出口）

☆講演：中村文明さん（多摩川源流研究所所長）

「木曾川源流の魅力とその可能性」

☆来賓あいさつ、連帯あいさつ

水資源機構理事長・甲村謙友氏、スミ設備会長・鷲見利幸氏、名古屋生活クラブ・伊澤眞一氏、小池靴店・唐沢尚之氏、東海地区木祖村人会

☆パネルディスカッション；上流と下流の交流・連携のこれから

パネリスト：宮林茂幸氏（東京農業大学）、圃中登志彦氏（木祖村）他

☆参加費：500円（資料代）

☆主催：全国源流の郷協議会

水源の里を守ろう 木曾川流域みんなの会

みんなの会はこれからどうする？

上流域での集会開催から新たな扉を開く



上流の人を招いたパネルディスカッション

＝第3回水源の里を守ろう 木曾川流域集会

みんなの会は活動の基調に「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」というものを据えている。全国水源の里連絡協議会が掲げたスローガンをそのまま拝借した。このスローガンは水源の里と位置づけたいわゆる「限界集落」をどうするのかという切実な課題の中から生み出された言葉だ。私たちがこのスローガンに共鳴した時、何か切実な課題に突き動かされてスローガンを拝借したのではなく、何か新しく面白いものを展開できるキーワードとして映ったからであった。この思いは間違いではなかったと確信しているし、その「面白さ」が源泉となり活動を推進してきた。活動を始めて5年半、力量不足ながらも「木曾川流域地図」、「味噌くみなもと」、「木曾青峰高校生の作品」などを通じてその面白さを具体化してきたつもりだ。

少し視点を変えて考えてみよう。国土交通省の水源地对策懇談会は1999年（平成11年）に「21世紀の水源地ビジョン」というものを提言している。この中で、上下流交流のあり方について、「流域の郷土文化や

地域資源を発掘し、これらを活かしつつ、流域固有文化の形成を促すことによって、上下流交流の意義を高めていくことが必要である」と提案している。同じく水源地の活性化について、「地方公共団体、NPO等における流域経営等に優れた活力ある人材を育成」「自らの手で環境の保全、復元等を図ることを目的とする市民・企業・行政のパートナーシップやボランティアの支援」「間伐材等水源地で生産される地場産品を活用」などが提案されている。

実はこの「21世紀の水源地ビジョン」は21世紀のダム事業・ダム管理をどうしていくかという視点と前提で提案されているものだ。そのビジョンの中で上下流交流の現状把握として「これまで上流山間地域は水源地として、治水、利水、環境面において下流地域の発展を支えてきた。このため上流山間地域では下流に対する不公平感を根強く持っているところも多い。……水源地の荒廃が進めばダム貯水池の治水、利水、環境機能の低下をきたすなど、下流地域にとっても大きな損失を被ることになる。このため、流域圏という視点から、上下流の新たな流域連携の形態を模索し、実際に



森の恵み、湧水の美味しさ＝長野県木祖村

交流に取り組む地域も現れはじめていますが、行政依存の取り組みであること、下流住民への情報発信が不足しているなどの課題がある」と指摘している。

12年前に国土交通省が指摘、提案したものとみん・みんの会が目指すものと何が違うのか、同じなのかよく考えてみる必要がある。ベストセラーになった『里山資本主義』がいうところの「お金ではない価値」

「豊かさの再発見」は確かに重要な問題だ。その本の中では様々な取り組みが紹介され、問題提起がされている。今みん・みんの会にとって必要なことは、12年前の国交省の提起とベストセラーの提起の双方を咀嚼（そしゃく）した上で今後を構想しなくてはいけないということなのだ。

冷静に考えれば現状では、みん・みんの会は下流域の団体である。しかし上流の民（みん）と下流の民（みん）を会の名称にしている以上流域の団体でとどまってい



森は水の源、水は命の源、川は命のつながり

てはギリ貧である。上流域の人々も「私はみん・みんの会のメンバーです」といって活動してもらえる状況を創り出すことによって私たちの活動は新たな扉を開くことができるのではないだろうか。その意味でも2014年は上流域で集会を開催したい。そして欲張っているならば、さらにその先に「交流から事業へ」と展望できれば、また「面白い」のだが。

齋藤まこと（みん・みんの会顧問）

木曽三川流域自治体サミットに参加して

台風一過の10月16日、一泊二日で私たち一行は長野県木曽町へと車三台で向かった。紅葉には少しばかり早いが大雨で洗われた木曽の山々が美しい。

会場となる木曽文化会館、玄関先ではユルキヤラたちが勢ぞろいで出迎えてくれ、心が和む。会場の入り口近くのブースで、当会自慢の木曽川流域図や味噌「みなもと」などを販売させていただいた。

舞台では宮城県気仙沼市のカキ養殖家でNPO法人「森は海の恋人」理事長である畠山重篤氏の基調講演。森林が生む鉄分が川から海へ運ばれてカキのエサとなる植物プランクトンをはぐくむこと、食物連鎖のこと、流域全体で森、

川、海の保全をする活動が大切であることなど、時に熱くエネルギーに、時には冷静に理詰めでお話しされた。

そして、いよいよ当会の河崎典夫事務局長の出番。この6年間の「みん・みんの会」の活動として「木曽川流域図」「水源の里基金」「流域集会」「上流域での大豆作り・味噌造り」などの上下流交流・連携の下流域市民活動を披露。はっきりした口調で落ち着いて説明。会場からは盛大な拍手を頂戴し、私たち会員一同もおおいに励まされた。

長野、岐阜、愛知、三重の70を超える自治体や団体、市民の約600人が参加した今回の流域サミット。最後に木曽郡の6町村の首長が壇



上に並んで、木曾町の田中町長=写真=が「川の水で結ばれた流域文化圏として、お互いに支え合うことが大切」として、森林整備と水源地

保全をはじめとする「木曾からの提言」をアピールしました。

17日は木曾川源流をめぐる散策に参加。水木沢では樹齢200年前後の木曾ヒノキ、サワラ、ブナ、トチノキ、ホウノキなどの天然林を見ながら散策、また味噌川ダム（奥木曾湖）の一周巡りも見学もし、木祖村の魅力も十分に堪能できた。

木曾川、揖斐川、長良川の三川の流域自治体が川の恵みを通して強く結び合うことを願うとともに、今後も「水源」「流域」をキーワードに私たち市民ができる交流、支援を息長く続けていきたい。

山根みちよ（みん・みんの会共同代表）

<第三期木曾川流域水源の里基金の運用について>

間伐材で作ったベンチを名古屋城天守閣、木曾福島駅前バス待合室へ

水源の里基金の第一期は長野県木曾町にある木曾青峰高校インテリア科3年生に間伐材でベンチを12脚制作してもらい、そのベンチを2011年2月に東山植物園へ寄贈しました。また、その年7月、4種類の絵本などを購入し木曾地域の10の小学校に各4冊を贈呈しました。第二期では、木曾青峰高校の高校生が制作した木のおもちゃを2013年3月に名古屋市科学館へ寄付。名古屋市科学館2階にある「おもちゃのひろば」で子どもたちに使われています。

現在、第三期水源の里基金の運用として進行しているのは、名古屋城天守閣内や木曾福島駅前バス待合室へのベンチの設置です。2013年8月20日、木曾青峰高校の生徒と先生、木曾広域連合の方と一緒に名古屋城を見学しました。2014年2月か3月には制作したベンチを寄贈することができると思っています。どんなベンチができてくるのでしょうか、楽しみです。

東山植物園のベンチや名古屋市科学館のおもちゃのように設置、使用されている中で今後の修繕などをどうするのかについて考えていかなければなりません。また、水源の里基金へのカンパをもっと募る方法を考え、使い道について、多様な視点の議論も必要だと思っています。ご意見をお寄せ下さい。

☆「木曾川流域水源の里基金」へのご支援、ご協力に、厚くお礼申し上げます。水源の里基金の活動をさらに充実していきたいと思っております。今後もよろしく申し上げます

みん・みんの会総会と上下流交流・連携の集いを8月31日開催

みん・みんの会の第4回総会が、2013年8月31日（土）午後1時から今池ガスビルA会議室で開催されました。総会では①2012年度活動報告②2012年度会計報告（収支決算）③「木曾川流域水源の里基金」の現状報告と運用④2013年度活動計画⑤2013年度予算について報告や提案が行われ、承認されました。総会に続いて上下流・交流連携の集いに約60人が参加して開催されました。

「カーボン・オフセット」で都市部と

つながり、自然共生基金でまちづくり

～三重県大台町の独創的な取り組み～

8月31日の総会後の上下流交流集会では、三重県大台町の谷昌樹さん（大台町宮川総合支所産業室・室長）が、講演しました。

大台町は「カーボン・オフセット」事業で、低炭素社会の実現に向けて優れた独創的な取り組みが評価されて、環境大臣賞を受賞しました。

谷さんは、清流日本一「宮川」や大台ヶ原、人口約1万人で高齢化率37.4%の大台町の概要から話されました。オフセット・クレジット（Jクレジット）についての説明に続いて、

この目的として①中山間地域におけるCO₂吸収機能などの生態系サービスの提供②宮川流域の生態系サービスを促進することで水害対策などの実施③森林管理活動を通じて、森・水に対する川上・川下住民の意識の向上を揚げられ、「カーボン・オフセット」で森・川を守り、都市部との交流・つながり、町は「自然との共生基金」で活性化につながっていると話されました。

「自然との共生基金」は自然環境の保全整備、集落対策、生活排水対策、人材育成、社会貢献活動への貢献という5つの事業に使われており、「カーボン・オフセット」は町全体の取り組みになっているので、お年寄りや子どもたちの日常会話に、頻繁にCO₂という言葉が出てくるそうです。（河崎）

雑草や暑さと向き合って3年目の大豆収穫

＜2013年みんな・みんな楽作隊の活動報告&次年度に向けて＞

2013年の大豆作りは楽しくもありながら、苦労が多いものとなりました。5月の種まきは順調でしたが、その後雨が降らず苗の一部の生育



大学生6人も参加して大豆の収穫＝9月、木祖村の畑が悪く、苗不足となりました。

苗の定植時には畑は土が乾いて、雑草も多く生えていました。黒マルチを張っていますが、

10cm程のビニールに空いた穴の中には草がぼうぼう。7月には3回の草取りを行いました。草取りの後には、ググッと大豆の苗が大きくなったような気がしました。除草剤や化学合成農薬は一切使わずに栽培する大変さを身体で実感しました。

秋には乾いた土の中でも大豆はちゃんと根を張り、何とか実を結んでくれました。

大豆の収量は、「みそ豆」が28.7kg、「たちながは」が31.8kg、「黒豆」は14.1kgでした。選別作業を経て、約85～90%位の量に、黒豆は60～70%位になる見込みです。去年に比べて収穫量は3割程の減収。原因は、苗植え時の暑さかもしれません。

2011年、大豆作りの第一歩を踏み出してから3年間、地元の高原荘・笹川さんのお世話になりながら何とか続けられて来ました。サニーレタス、トウガラシ各種、トウモロコシ、カボチ

ヤ各種…。

2014年は大豆作りに参加した人たちが、収穫したものをもっと食べたり、持ち帰れるように

なればと欲張りな計画案も検討中です。また、夏場には、高原荘で活用できるような薬物を作るプランも検討しています。

<味噌『みなもと』の販売で皆さんにお世話になり、ありがとうございました>

2011年産の大豆で仕込んだ味噌『みなもと』は、今夏からの販売で大口購入してくださった会員の方々、名古屋生活クラブの会員の方々、店舗での販売を快く引き受けてくださった方々、少量ずつ地道に販売を広げてくださった方々、皆さんのご支援・ご協力をいただきながら何とか完売のメドが立ちつつあります。ありがとうございました。まだ少量ながら余裕がありますので、ご賞味下さい。500g一袋につき百円が「水源の里基金」に積み立てられます。

今まで多くの方々が食した感想では「旨味があって美味しい」との評価をいただいております。

<2014年の作業予定>

5月中旬	大豆種まき
6月上旬	苗植え
7月上～下旬	草取り、トウモロコシのネット張り
7月下旬	味噌の天地返し
8月下旬	草取り、とうもろこしなど収穫、みそ豆の枝豆収穫
9月中旬	みそ豆収穫、たちながは、黒豆の枝豆収穫
10月中～下旬	たちながは、黒豆の収穫、みそ豆の殻たたき
11月中旬	たちながは、黒豆の殻たたき
12月	豆の選別作業

以上は、大枠の予定です。詳細はまた改めてお知らせします。

<一緒に大豆作り・味噌造りをしてみませんか>

大豆作り作業の参加希望、みん・みん楽作隊及び楽作隊賛助会員への参加希望は事務局、または担当者までご連絡ください。なお、作業に参加希望の方はボランティア保険（1年間390円）に加入していただきます。

みん・みん楽作隊は 1万5千円/年 賛助会員は5千円/年 それぞれ、味噌2kg（玉造り1kg、突き込み1kg）と大豆1kgを配分。ただし鳥獣害や作況により少なくなることもありますのでご了解ください。

春は新緑が美しく、夏は本当に涼しい、秋は紅葉に囲まれての作業です。澄んだ夜空は月明かりの中でも天の川が堪能できます。私たちと一緒に大豆作り・味噌造りをしてみませんか。

みん・みん楽作隊 担当 近藤 進 (☎携帯 090-4150-6156)

<書評> 『里山資本主義』

『里山資本主義～日本経済は「安心の原理」で動く～』（角川 one テーマ 21 新書）は、今話題になっています。市民、農業者、企業人、研究者など、いろんなところで、この本をめぐる話合

う機会がありました。この書評、感想などを2人から寄せていただきました。

読んで愉快になり、心が和み、暮らしの未来が広がる

里山資本主義という耳慣れない語、この語を生んだのは、中国山地の過疎の村に踏みとどまって、地域の資源を見出し地域循環型の暮らしを堂々と、そして、ゆったりと生み出している人々を取材して世に問うた、NHK 広島取材班の2人の制作者とこの本の著者・藻谷浩介氏であります。

里山資本主義といいますが、資本主義という固定観念にとりつかれないで、里山資本とくくって考えてみると、日本国中の山地や島には今は顧みられなくなった木材や休耕田、畑、水源、そこに生きる野生動物もいれて、豊かな資源にみちあふれています。この本に紹介されている人々の身近な資源を活かし、人との絆や自然とのつながりを第一とする実践は、マネー資本主義のお金では得られない、金銭換算できない世界があることを知り、「安心」を実感することができています。

本のなかで紹介されている事例は目次の章ごとの見出し項目の数の多いことでもわかりますが、一つ一つ読んで愉快になり、心和み、このような暮らしを日本の将来に向かって一人でも多く築いていく工夫をすれば、世の中は今よりゆとりがある生活空間が広がるのではないだろうかと思われる内容です。

田舎暮らしを推奨しているのではないので、里山資本主義は里山で暮らしていない圧倒的多数の日本人の心の中にも、きちんと居場所を見つけることができると著者は書いています。都会の中でも里山も畑も身近にまったくなくても、ちょっと考えただけで、ささやかな実践は可能だと。関心と興味をもって、読まれることを是非勧めたい本です。(水原博子)

時代の潮流が動き始めた

読後感想としては、いや、そのタイトルの『里山資本主義』を見ただけで、さらに、藻谷浩介さんの名前を見ただけで直感的に「<やりましたね！>」と思わず笑みがこぼれたものでした。

以前、私の編著『新次元・環境創生』2009年4月20日発行の中(12~14頁)で述べているのですが、昔と比べてみて現代社会が重要視している順番は①マネー資本②社会資本③自然資本となっているが、次の時代に必要なのは、①自然資本②文化資本③マネー資本の順位になるであろう述べました。さらに日本は流域圏の概念を中心に置くガバナンスが求められているとも提案し、「流域基本法」骨子案も付け加えております。(自慢ではありますが、この本は各書評では五つ星など好評でした)

このように里山の活性化には小さくとも里山に産業クラスターが各地に出来上がってくる時代を求めるといふ要旨(山里クリエイティブコモンズ)でした。

このような思いを強く抱いていた私としては、まさに時代の潮流が動き始めたのだとの感想です。NHKの特集番組で放映された「里山資本主義」藻谷浩介監修がパソコンからも見る事が出来るので、是非とも多くの人に見てもらいたいと思います。

この本の中で、強く述べられている事柄の中にはマネー資本主義に代わるというよりは、むしろ補完的な経済が里山には歴然と存在し、かつ今後の日本を救う道がこれである！と喝破しています。私も全く同感です。

その意図は、日本が貿易立国として、経済を盛んにして来ているが、マネーだけに着目している

場合は、為替相場や国際マネーの行き違い等により、どんな危険な目にあわんとも限らないのが世界経済の実情です。この貿易立国を私は「攻めの経済」と呼んでおり、それに対して「日本固有の守りの経済」が必要であると、人前で話をする時には強調してきました。これが正に『里山資本主義』の言わんとする趣旨と全く同じです。

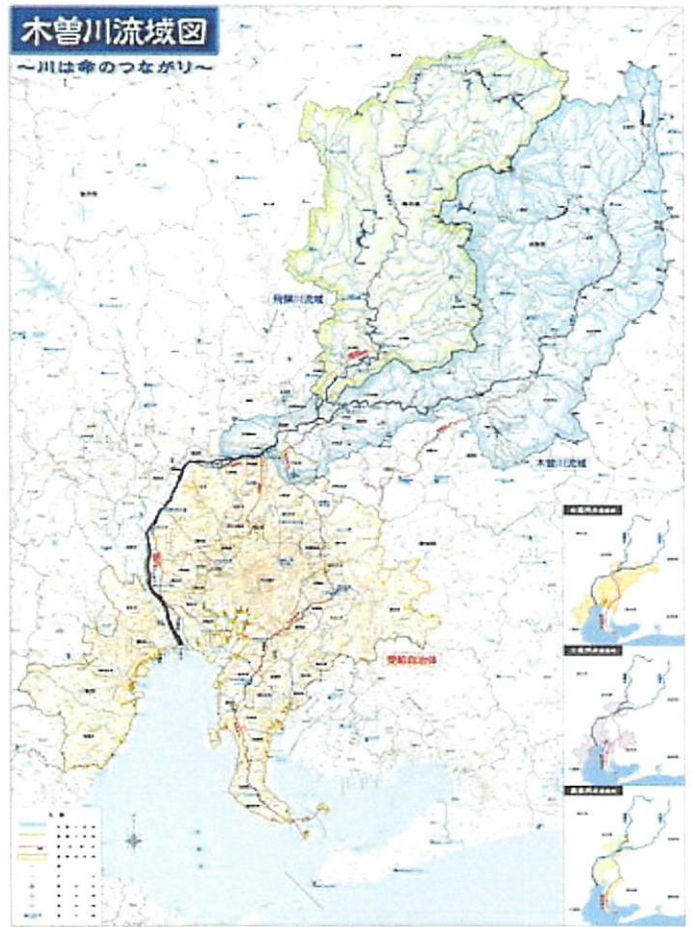
今後、この趣旨に同調する同志とともに社会的な運動体を結成出来たら嬉しいと思うこのごろです。(創建 筒井信之)

*『木曾川流域図～川は命のつながり～』は、木曾川源流から伊勢湾、愛知用水までのマップ。A1判で両面フルカラー。木曾川、飛騨川、愛知用水の“川が主役”の地図です。1部800円(内100円は水源の里基金へ)、別途送料。申し込みは下記へ。

<編集後記>

2013年は、充実した1年でした。1、2月は木曾青峰高校の「おもちゃ」、3月は第5回水源の里を守ろう木曾川流域集会、5月は白川町林業フェスティバル、5月からは毎月木祖村の畑で大豆づくり、6月下旬は「住まいの耐震博覧会」(ホートメッセなごや)で展示・販売、7月下旬は木曾駒高原で味噌の「天地返し」、8月は名古屋城へ木曾青峰高校と見学、合わせて南陽高校カンパニー部との交流、そして月末に総会と上下流交流・連携集会、9月は今池祭り、10月は木曾三川自治体サミット、12月はインターネットフォーラムなどを取り組んできました。やっと1年半ぶりに「ニュース」を発行することができました。反省!

2014年もよろしくお願ひします。(事務局)



ホームページを近日中に刷新します。ご覧下さい

☆☆☆第3期木曾川流域

水源の里基金へ募金の

ご協力をお願いします☆☆☆

<郵便振込口座>

口座番号; 00810-1-158556

加入者名; みる・みるの会

(水源の里基金と記してください)

水源の里を守ろう

木曾川流域みる・みるの会

☆共同代表☆

山根みちよ(前日進市議)、

伊澤眞一(名古屋生活クラブ)

☆顧問: 斎藤まこと(名古屋市議) ☆

☆連絡先☆

〒464-0075

名古屋市千種区内山3-7-11 斎藤事務所気付

TEL 052(745)1001 FAX 052(741)2588

HP: <http://www.kisogawaminin1.net/>

e-mail: suigennosato@gmail.com